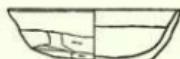




M V-3 ②類 17-3 口径11.5 器高3.3cm

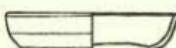
小形。つくりは2類に似るが、体部は短く、笠ナデつけされる。口縁部は内湾氣味に直立する。胎土、焼成は2類と同じ。橙褐色、内面橙赤褐色、一部黒褐色。



M V-4 類 17-4 口径9.2 器高2.7cm

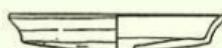
M IV-5 類系のもの。口縁部横ナデ。体部下半横笠削り後、底部笠削り、内面はナデた後、体部に継斜位の暗文風ミガヤが雜に施される。底面はナデのみ。胎土は2類と同じで淡橙褐色を呈し、器面の磨滅していない部分は橙赤褐色を呈する。赤彩か？

2 皿



M V-5 類 17-6 口径9.1 器高2.1cm

M II-5 ①類系のもの、底部は平坦に削られ、内面に厚くなる。口縁部は内湾氣味に開く。胎土、焼成は2類と同じ。外面体部下半は笠ナデつけが施される。色調は橙赤褐色を呈する。



M V-6 類 17-11 口径11.4cm

M IV-6 ②類系のもの。胎土、焼成は2類と同じ。淡橙褐色。



M V-7 類 17-12 口径16.3cm

M II-7 ①類系のもの。胎土、焼成は2類と同じ。淡橙褐色。2類の杯とつくりも同じく、口縁部横ナデと底部笠削りの間は開き雜になでられる。

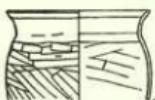
3 鉢



M V-8 類 17-13 口径15.0 器高3.8cm

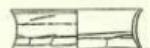
底部は、ほぼ平坦となり、体部と口縁部の境には、稜をもたず、口縁部は内氣味に直立する。胎土には角閃石、浮石、などの微～細粒砂を多く含み、焼成も非常に良く焼きしまる。明橙褐色。底部は焼成後、穿孔され、磨られた様になる。

4 壺



M V-9 類 20-18 口径15.2cm

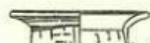
M IV-9 類系のもの。胴部はやや開くものと思われる。胎土には酸化鉄が目立つ、その他、浮石、角閃石などの微～細粒砂を含み、薄手で焼成も非常に良い。淡橙褐色。



M V-10 類 17-17 口径14.0cm

M II-8 類系のもの。

5 壺



MⅦ-11類 1-10 口径19.6cm

MⅦ-8類系のもの。胎土、焼成からこの時期のものと判断した。胎土には角閃石、絹雲母片岩、浮石などの微～細粒砂を多含し、焼成良く焼きしまる。明橙褐色。



MⅦ-12類 17-14 口径20.0 胸部最大径21.6cm

MⅦ-9類系のもの。径はやや大きくなるものと思われる。胎土には酸化鉄目立ち9類に似るがやや密。橙褐色、2次加熱により部分的に朱～暗褐色となる。口縁部は一度立ってから「ハ」の字状に開く。



MⅦ-13類 17-15 口径20.8 胸部最大径21.4cm

MⅦ-10類系のもの、頸部は直立～外傾し、口縁部は内湾気味に開く。胎土、焼成は11類と同じ。橙褐色、2次加熱で黄～暗褐色を呈する。

国分第1期（K I）

第46号住居跡（火災住居）

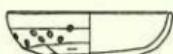
1 坯

底部はほとんど扁平に近くなる。



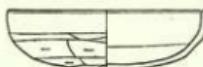
K I-1①類 46-8 口径12.0 器高3.4cm

MⅦ-2①類系のもの。



K I-1②類 46-7 口径12.3 器高3.4cm

この器種は量が多い。底部には丸味をもつ。体部は開いて立ち上がり、緩い稜をもって口縁部は直立するか、やや内湾して開く形態となる。胎土には角閃石、浮石などの微粒砂を含み焼成良く焼きしまる。口縁部横ナデ整形と、外底部窪削りの間は開き窪ナデつけが施される。内面ナデ。



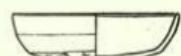
K I-2①類 46-16 口径14.0 器高4.3cm

MⅦ-3①類系のもの。



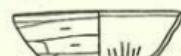
K I — 2 ②類 46—3 口径12.6 器高3.4cm

M V — 3 ②類系のもの。



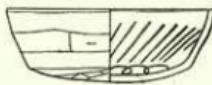
K I — 3 類 46—12 口径11.8 器高3.4cm

M V — 3 ②類系のもの。胎土は1 ②類と同じ。



K I — 4 ①類 46—15 口径12.3 器高4.0cm

M V — 4 類系のもの。胎土には角閃石、酸化鉄、雲母、浮石などの超微粒砂を含むが、砂粒の量少なく、やや軟質。内面磨滅する。底部には、暗文は認められない。橙褐色を呈し、口縁外面は一部灰黒色となる。



K I — 4 ②類 46—18 口径14.9 器高5.2cm

大形。胎土、焼成は1類と同じ。内面底部と体部に暗文が施される。外底面に一部橙褐色部を残すのみで、2次加熱により内外面とも黒色～灰色となる。口縁部の一部は高温のため気泡ができ沸騰したようになる。口縁部と体部の境に竹管文が施される。

2 盆



K I — 5 類 46—13 口径12.3 器高2.8cm

M V — 5 類系のもの。口径対器高が4 : 1か、それより口径の大きいものを一括した。

3 墓



K I — 6 類 46—17 口径14.5 器高4.9cm

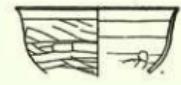
M II — 7 類系のもの。底部は扁平となる。胎土、焼成は1類と同じ。つくりは2 ①類に似る。外面口縁部と体部の間に竹管文が施される。

3 鉢



K I — 7 ①類 46—20 口径19.4 器高9.6cm

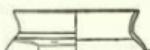
M V — 8 類系のもの。底径が広がり、器高が低くなる。体外面下端に細い棒状のものでナデつけたような痕跡が残る。



K I — 7 ②類 46—19 口径23.6cm

体部下半に張りをもち、口縁部は外反する。胎土は他の類とは異なり、雲母などの超微粒砂と、浮石、角閃石などの微粒砂を含み、非常に密で、焼成も非常に良い。明橙褐色。内外面に煤付着。口縁部ナデ直下は削られず、範ナデつけとなる。

4 壺



K I — 8 類 46—30 口径18.0cm

M V — 9 類系のもの。口縁部横ナデ後、肩部横位の範削り、その後、頸部と肩部の間に約1.2mmの沈線が回る。胎土には、浮石、酸化鉄、角閃石などの超微粒～微粒砂を多含する。薄手。焼成良い。口縁部橙茶褐色、肩部外面黑色。

5 小形台付壺



K I — 9 類 46—24 口径9.4cm

口縁部は最低2度にわたって横ナデされる。その後肩部横位の範削りが施される。肩部は余り張らず、頸部は長く内傾して立ち、長い口縁部が「ハ」の字状に開く。胎土、焼成は8類と同じ。

6 壺



K I — 10 類 46—29 口径19.6cm

M V — 11 類系のものか？ 肩部にはほとんど張りをもたず、頸部は内側に肥厚する。口縁部は大きく開き端部は直立する。胎土、焼成は8類と同じ。明橙褐色。約半分内外面とも暗灰褐色～黒褐色。

K I — 11 類 46—28 口径18.8cm

M V — 12 類系のもの。肩部から頸部への移行は10類と同じ。口縁部はM V — 12 類よりもやや開く。胎土、焼成は9類と同じ。明橙褐色。肩部外面黑色。



K I — 12 類 46—31 口径18.6cm

M V — 13 類系のもの。頸部は直立する。胎土、焼成は9類と同じ。暗茶褐色、一部黑色。



国分第Ⅱ期（KⅡ）

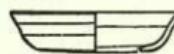
第16、44号住居跡

1 杯



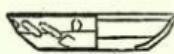
KⅡ—1類 44—1 口径11.7 器高3.3cm

KⅠ—3類系のもの。器内は厚い。浮石、角閃石、酸化鉄を含み焼成良。橙赤褐色。外面体下半は窓ナデつけが粗く施される。内面は滑らか。暗文はない。



KⅡ—2類 44—2 口径11.9 器高3.0cm

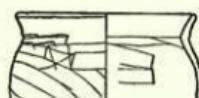
平底で体部には丸朱をもち一坦括れて、口縁部は「ハ」の字状に開く。



KⅡ—3類 16—4 口径12.2 器高2.6cm

平底で体部は「ハ」の字状に開き、緩い稜をもって口縁部は更に開く。

2 小形台付甕



KⅡ—4類 20—10 口径12.8cm

肩部はわずかに張りをもち、口縁部は「ハ」の字状に開く。口縁部の形態は場所により窓削りの感じで異なる。胎土、焼成、手法は5類と同じ。



KⅡ—5類 20—11 口径11.5cm

KⅠ—9類系のもの。

3 瓢 口縁部の形態はほとんど「コ」の字状を呈する。



KⅡ—6類 44—3 口径14.4cm

KⅠ—11類系のもの。



KⅡ—7類 20—12 口径17.4cm

KⅠ—12類系のもの。



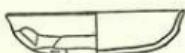
KⅡ—8類 16—2 口径19.6cm

口縁部は最低2度に亘ってなでられ、頸部と口縁部の境を強いナデによって強調する。

国分第Ⅱ期 (K Ⅲ)

第21、56号住居跡

1 壺



K Ⅲ-1類 56-1 口径12.6 器高3.1cm

M I-1類系のもの。



K Ⅲ-2類 22-8 口径12.7 器高3.8cm

K Ⅲ-2類系のもの。器肉は底部で薄くなる。口縁部は内側で薄くなり、内湾気味となつて開く。



K Ⅲ-3類 22-7 口径12.8 器高3.3cm

形態は2類に似るが、底部にやや丸味をもち、口縁部は「ハ」の字状に開く。

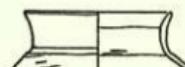
2 皿



K Ⅲ-4類 21-1 口径13.7 器高2.2cm

底部には僅かに丸味をもち、口縁部はやや外反して開く。

3 小形台付甕



K Ⅲ-5類 21-2・22-15 口径10.5 接合部径5.0 複部径9.0cm

肩部には張りをもち、頸部は直立し、口縁部の開きは小さい。台部は、安定した「ハ」の字形に開く。



4 甕



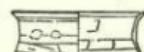
K Ⅲ-6類 21-4 口径19.6cm

K Ⅲ-7類系のもの。きれいな「コ」の字状を呈する。



K Ⅲ-7類 22-12 口径23.2cm

K Ⅲ-8類系のもの。



K Ⅲ-8類 21-3 口径19.0cm

頸部は外傾し、口縁部は比較的短い。

2 若宮台遺跡の遺構と遺物について

若宮台遺跡は古墳時代後期前葉から飛鳥・奈良時代を経て平安時代にわたって集落が営まれた遺跡であった。

当遺跡周辺は神流川の自然堤防となっており、ほぼ平坦で、浅い谷によってやや台地状に分けられ、古来、川の氾濫により幾度となく、被害を蒙って来た事が調査中の遺構の検出、覆土の状態等から観察された。このような条件の遺跡では、遺構、遺物の共伴関係を明確にする事は、殊に切合いで量複した遺構では難しい場合が多い。残念ながら、様々な制約の中で、それらを分別する事は図面上ではできず、本文中で述べてある。又、調査は遺跡全面の調査ではなく、遺構の密集部分の確認調査であり、集落の全容は残念ながら明らかにすることは不可能であった。

以上、お断わりした上で、遺物に関しては本文中で述べられており、それらの補足と遺構についてその概略を述べる。

調査の結果検出された住居跡64軒、掘立柱建物跡1棟、土壙10基中、時期の判明した遺構は次の通りである。

鬼高第Ⅰ期……第31・39・40・45・50・63号住居跡

Ⅰ期……第47号住居跡

Ⅱ期……第13・36号住居跡

Ⅵ₁期 … 第38・41・55号住居跡

Ⅵ₂期 … 第14・24・26・35・49・51・59号住居跡

Ⅶ期……第1・8・42・62・64号住居跡

真間第Ⅰ期……第5・9・19・33・43・58・61号住居跡

Ⅰ₁期 … 第2・10・54号住居跡、第2号土壙

Ⅰ₂期 … 第22・28・29・53号住居跡

Ⅲ期 … 第57・60号住居跡

Ⅳ期 … 第6号住居跡

Ⅴ期……第18号住居跡

Ⅶ期……第7・17・34号住居跡

国分第Ⅰ期……第46号住居跡

Ⅰ期……第16・44号住居跡

Ⅱ期……第20・21・56号住居跡、第6号土壙

鬼高Ⅰ期は5世紀末頃をあて、Ⅰ期とⅡ期の間、Ⅵ₂期とⅦ期、Ⅶ期と真間Ⅰ期の間にやや時間があるようである。真間Ⅰ期を7世紀末～8世紀初頭、国分期Ⅰ期は9世紀前半、Ⅰ期は9世紀後半、Ⅱ期は10世紀に入るものと考えた。なお、各期の本遺跡の分期の目安としたものであって、厳密な形式設定によるものではない。

以下、順を追ってその概略を見てゆく事にしよう。

鬼高Ⅰ期は第31・39・40・45・63号住居跡がある。

器形は壺・甕・瓶・坏・塊・高坏がある。一括資料としては第40号住居跡例が好例であろう。

壺は球形胴と大きく外反する口縁をもち、頸部に段を持つ、この時期の特徴となるものがある。

甕はやや長胴化しており、中央部に最大径をもち、頸部でしっかりと括れて外反する。甕には広口の大形のもの、小形のもの、肩部がやや張って長めに立つ口縁部を持つものがある。

坏は外縁で内傾する口縁部をもつもの。丸底で外反する口縁をもつもの。半球形に近く、口縁部が短く外反するもの（I-4）、扁平な底部と丸く稜を持って内湾気味の口縁をもつものがあるが40住-14例のように、体部と口縁部の境にかすかに段をもち、内湾気味に直立するものが混在する。I-4としたものの内、44住-10例は内面に暗文篦磨きを有し、県北から群馬県方面に多く見られるものである。塊は口縁外傾のものと、従来の内湾するものがある。

高坏は3種類あり、和泉的な坏部に稜をもつものと、これの全体に丸味をもったもの、坏に脚部をつけたものがあるが、総じて短脚である。

瓶は胴下半部が張るものとやや大形で胴部の張らないものがある。

なお、この時期は、和泉期に統いて丁寧なナデ、篦磨き調整スリップ掛けを施す坏・高坏・小形壺が多く、赤色塗彩を施すものが2・6・7類の坏、13類の壺に見られ、壺・瓶も丁寧な作りで、胎土も精選されている。

次に概期の住居跡は、31・39・45・63の各住居跡は主軸の方向がN-47°~68°-Eとほぼ似ており、40住はN-32°-Wとやや異なっている。住居跡の形態は31・40号住など、長辺の向かって右寄りにカマドをもつものが特徴的である。又、総じて遺物は多いが、40・45号住は焼土・炭化材が多く出土し、火災を受けている様である。カマドは壁に掘り込まれておらず、高坏を伏せて支脚としたものが39・40・45号住と、3例がある。貯蔵穴は31・40号住例があり、いずれもカマドに向って右側に方形のしっかりした形態のもので遺物が多く出土している。

ピットはわからないものが多いが、39住は4本柱穴をもち掘り込みも深い。

鬼高Ⅰ期とⅡ期の間は1時期があり、いわゆる鬼高期特有の、稜を持って直線的に立つ口縁部をもつ坏が特徴的な段階で、概期の遺構は後張遺跡に多く見られる。（註1）

鬼高Ⅱ期は、第47号住居跡1軒のみである。

器形は壺・甕・瓶・坏・高坏がある。

壺は口縁の外反が丸味をもち、頸部の括れがよわく、肩部は張りがないが、球胴状を呈する。

甕はⅠ期より長胴化するが、底部はまだ突出しており、頸部は括れて口縁はやや外反気味になる広口の小形甕もある。

坏は4種類あり、1・2は稜をもつもので、1・2は口縁部の内傾するものと、直線的に長く立つものがあり、これは前段階に引き続き存在し、1まわり大形のものがある。2は口縁部がやや外傾するものである。3は丸底のものである。高坏は上記の坏に脚をつけた形のものと、脚部がそのまま大きくラバ状に開くものとがあるようである。

瓶は長甕と同様に長胴化する。大形のものと小形のものがある。坏類は器肉が均一で作りは良く焼成も良いものが多い。

住居跡は、方形プランで、主軸の方向はN—32°—WとⅠ期40住と同じである。カマドは壁に接しており、甕を転用して支脚としており、向って右脇にしっかりした貯蔵穴を有し、カマド周辺に遺物が多い。これも火災を受けており炭化材があり、それと共に礫が散乱していた。

鬼高Ⅲ期は第13・36号住居跡がある。特に36号住居跡は一括廃棄された遺物が出土しており、好例であろう。

器形は壺・甕・瓶・壺・甕・鉢・高杯がある。

壺は小形のものと大形のものがあり、大形のものは球胴で、頸部が立ち気味で長く、やや段を持って口縁部が外反するものがあり特徴的である。又、頸部に段をもって内湾気味に立上がるもの(Ⅲ—10②類)は中道遺跡例があり、小形壺であろう。(註2)

甕は前段階に比べて更に長胴化し、肩部の張りがなくなり、最大径を胴部中位以下にもつようになり、頸部の括れはゆるやかになる。少數ながら、台付甕も存在する。

瓶は大形の砲弾形のものと小形の鉢形のものがあり、口縁はゆるやかに外反するようになり、大形のものは粗い箇削りで、小形のものは箇ナデ等、丁寧なつくりで、胎土の精選されたものがある。

壺はやや扁平になり、口縁部形態は開き気味に直立するもの(1)、直線状に外反するもの(2)、稜が丸味をもって外反するものがあり、他に丸底で口径が内湾するものもある。甕は平底のものがある。

高杯は上記の壺部に大きく外反する脚部をもつものと、脚部が「ハ」の字状に開くものがある。甕は口径12.5cm前後でまとまっており、概して焼成の良いものが多く、高杯・甕には胎土の精選され淡橙色を呈し、焼成も良いものが混じる。

住居跡は大形であるが掘込みは浅い。

主軸の方向は13住は不明であるが、36住はN—138°—Wと本遺跡では珍しくカマドを南向きにもち、支脚に河原石を芯にして甕底部破片を伏せて使用したもので、カマドは向かってやや左寄りで左脇に貯蔵穴がある。

鬼高Ⅳ期の住居跡は第38・55号住居跡がある。

遺物は38住例は床面上に置かれたもので、55住例は一括廃棄されたものと床面上に置かれた様に出土したものがあるが、さほどの時期差はない様である。

器形は壺・甕・瓶・壺・甕がある。高杯も梗期にはある様であるが、ここでは併出していない。

壺は前段階の形態を受けついぐ、大形球胴のものと、小形の広口壺、壺を思わせるような壺等々がある。小形の壺には、頸部ではなくとんと括れず、口縁端部をややつまみ出すものと直立するものがある(Ⅳ—11例)。

甕は胴部の張りが更になくなり長胴化し、最大径を胴中位に持ち、口縁部は括れて短く外反する。

瓶は大形のものに頸部で括れるものと括れないものの2種があり、小形のものも口縁はゆるやかに更に大きく外反する。甕・瓶は器肉の厚いものが多い。

壺は総じて扁平になり口径の大きいものが多い。種類も稜をもつもので口縁部の内傾して外反するもの、立ち気味のもの、外傾するもの、そして丸底のもの等があり、特に3・6類の2段口縁状を呈するものは、1類の壺と共に黒色処理されたものであり、下田43住例と共に県北地方に特徴的

に見られるものである。胎土は精選されている。

壺はやや大形で、口縁部直立するものである。

住居跡は、主軸の方向は39・55住はほぼ等しく、N-64°~78°-Eである。プランは38号住は大形で、55号住は小さい。いずれも浅く、カマド等もはっきりしないが、55号住例は甕を伏せて支脚としたものである。物遺はやや多く、2軒共、壺がつみ量ねた状態で出土したり並べられた状態で出土しているのは注目される。これは原遺跡12住例、下田遺跡43住例などにも見られる。

鬼高Ⅴ期の遺構は多く、第14・15・24・26・35・49・51・59号住居跡がある。一括遺物としては26住例が好例であろう。

器形は壺・甕・瓶・壺・皿・鉢がある。

壺は球胴状を呈し、肩部に段を持って口縁部が短く丸く外反するもので大形と小形広口のものがある。

甕は更に長胴化が進み、口縁部に最大径を持ち、胴部は張らず口縁部は大きく長く外反するものと小さく短かく外反するものがある。又、肩部に一部横範削りするものがあり、器壁が薄く、前記の甕より口縁は大きく外反する。

瓶も長甕と同様の変化が見られる大形のもの2種と小形の鉢形で多孔のものがある。

壺は口径の小さいもの(12cm前後)が多くなる。又、稜をもつものは稜がやや鈍くなり、やや括れて外反するもの、外反するもの、直立気味に外反するもの、稜が丸く口縁がゆるく屈曲する大形の壺、2段口縁状のもの、丸底のものがある。壺は概して胎土は精製され、器肉は薄く、焼成の極めて良い淡橙色を呈する。やや小ぶりのものが多く、皿・鉢もこれに準ずるようである。

皿・鉢は概期に出現するようである。共に口縁が外反するものである。

住居跡は59住が最も大きく、26住は中形、14・15・24・49住は小型のものである。主軸の方向は14・24・26住がN-62°~71°-Eでまとまり、15・49・51・59住がN-93°~109°-Eでまとまり或いは2群に分けられるかと思われる。カマドは遺存状態の良いものが無いので、はっきりしないが壁をやや掘り込んでいるものが多く、26住例は河原石を芯に、壺を伏せて支脚として使用したものである。カマドは絶じて、向かって右寄りが多く、59住は右脇に貯蔵穴をもっていた。

鬼高Ⅴ期とⅥ期の間はやや時間差があるようである。

鬼高Ⅵ期の遺構は、第1・8・42・62・64号住居跡がある。一括資料は、第1号住居跡であろう。器形は壺・甕・鉢があり、皿も概期にあるものと思われるが共伴していない。

壺は胴丸の大形のものと小形の丸底状のものがあり、大形のものは短く外反する口縁をもつ。小形のものは立ち気味のもの、大きく外反するもの、短く立ち気味に外反するもの等、口縁形状により4種がある。全体にやや肩部が張り、やや長胴化している。

甕は長甕で、ほぼ直線的な胴部から、頸部でやや段を持って外反し、口縁部形状により3種に分かれれる。

瓶は胴部に丸朱をもち、頸部でゆるやかに括れて強く外反する。

壺は前段階に似るが、やや口径の小さいもの、浅いもの(2・3類)があり、稜は丸く括れて外反する口縁のもの(1類)、とかすかに稜を持って外傾するもの(2・3類)、そしてやや怪が大きい

丸底で内溝するもの（4類）がある。

鉢は坏状の坏部が深く大形のものと、やや深いものがある。

概期の土器は総じて器肉が薄くなつておる、特に大形の壺・長甕に顯著である。又坏・鉢は胎土が精製され、焼成も極めて良い淡橙色を呈する器厚の薄いもので前段階のものに似る。

住居跡についてみると、1・8・42・62住がN-64~90°-Eでやや幅があり、64住はN-47°-Eとやや異なつた方を向く。総じて掘り込みは浅く、詳細はわからないものが多い。カマドのはつきりわかるものは1・62住で壁をやや掘り込んでいる。62住例は長い煙道を持つものである。貯蔵穴は62・64住に、そして柱穴のはっきりしているものは1住例のみである。大きさは1住が大きく5m前後で62住はやや小さく、8・64住は更に小形で3mクラスである。

鬼高Ⅴ期と真間Ⅰ期の間はやや時間差があるようである。この間に雷電下22住例等の資料が来るかと思われる。又、Ⅴ期とした8住の坏頬も口径cm11前後のものでこの時期まで下る可能性がある。

真間Ⅰ期とした遺構は多く、第5・9・19・33・43・58・61号住居跡がある。遺物は概して少ないが、33・43・58住の一括資料がある。

器形は壺・甕・坏・塊・皿がある。

壺は胴丸の大形のものと、小形のものがあり、肩部に段をもつて口縁外反するものと、肩部からゆるやかに括れて大きく外反するものの2種が大形のものである。19住例（20住図中）は前者でつくり、焼成共に非常に良く、33住-7は後者で、ややゆがみ等があり焼成も良くない。

甕は器肉が薄く胴上半部でやや丸味をもち、口縁は「ハ」字状に外反する。縦窓削りを施すものと、胴上半部に横窓削りを施すものがある。

坏は4種あり、縫をもつものと丸底の前段階の器形を受けつぐものと、扁平な丸底の大小2種がある。小形のものは口径11cm前後、大形のものは口径13cm前後のものと、16~17cm程のものがある。

皿は扁平な丸底状を呈し、鈍く縫を持って口縁が外傾する大形のものと、一まわり小さく、端部のみが直立するもの、底部丸味が強く、口縁外反するものがある。

塊（？）は丸底の大形で口縁や内溝するもので、口縁部下まで窓削りを施すものである。

土師器類は全体に作りが均一なものが多く、胎土は精選され、焼成も前段階に比して非常に良い。甕類はろくろを使用したかの如く形が整つておる、胴部は窓削りによって極めて薄く仕上げられているものが多い。

小形の宝珠鉢と返りをもつ須恵器蓋・底部に静止糸切り痕を残し、周辺部手持ち窓削りを施す小形の須恵器・提瓶が共伴する。

遺構についてみると、主軸の方向は9・19・33・43・58住がN-65°~113°-Eのやや広い範囲に入るが61住はN-22°-Wと方向が異なる。大きさは61住が最大で6.5mクラス、58・5住はやや小さく、9・19・33住は3mクラスである。カマドはいずれもしっかりとおり、9住以外は煙道が検出されている。貯蔵穴等は少なく33住のカマド右脇にあるのみである。又、43住はカマド袖に甕を伏せて芯としたものである。

真間Ⅰ期の遺構は第2・10・54号住居跡である。

器形は壺・甕・坏・皿・鉢がある。

壺は大形の胴丸のものと小形のものがあり、甕は肩部の横～斜め範削りにより、口縁は「く」字状に角度をもって直線外反する。

坏は偏平丸底で、大小2種あり、前段階に比して、口縁はやや立ち気味になる。皿は、底部が扁平なものと「一」字形のやや腹をもって外反するものと小形のものがある。鉢は2種あり、1は口縁が内湾するものと、分厚く、外反するものがある。土器器は甕・皿類は器内の薄いものが多く鉢は焼成が良い。坏・皿に焼成の悪いものが混じる。擬宝珠つまみと、環状紐をもち、低い返りをもつ大形の蓋・坏が共伴する。これは水深遺跡HグリッドNo.17の須恵蓋と同形、1まわり小さいもので、全子真土氏は水深Ⅰ期に比定している。（註3）

住居跡についてみると、2・10住はほぼ方向が等しく、54住はやや北を向く。大きさは3軒共、3～4.5mクラスである。カマドも不明なものである。

真間Ⅱ期の遺構は第22・28・29・53号住居跡がある。土器の器形は壺・甕・坏・塊・皿がある。壺は胴丸のもので「ハ」字状に開くもので大形。甕は肩部の張りがやや出てくるものでゆるく大きく外反する。肩部横範削りである。坏は大・中・小あり、口縁は立ち気味に、底部と体部の境にやや腹が出てくる。又、皿は底部平坦で口縁が内湾するものが出現する。Ⅰ期からの大形の皿もある。須恵器は、擬宝珠紐をもち、かえりを有するが偏平な小形の蓋が共伴し、坏は大形の高台付のものがある。高台付坏・長頸瓶が出土している。

小形の土器器は口径が12cm前後のものが多くなるようである。又、焼成はやや悪いもの多い。住居跡は、主軸の方向はN-105°～116°-Eとほぼ一致し、長軸方向で3.5m前後と大きさも揃い、幅道は29・53住に検出されており、総じて掘り込みの深いものであった。

真間Ⅲ期の遺構は、第57・60号住居跡である。器形は壺・甕・坏・塊・皿がある。

壺は薄手で胴の張る大形のものと小形丸底のものがあり、甕は胴上半でやや張りやや括れて直線状に「ハ」の字外反するものである。坏は前段階のものに、屈曲する口唇部をもち内面に放射状暗文範磨きを施すものと、平底の須恵坏を模したような坏が加わる。平底のものには放射状暗文を口縁部に施す、胎土・焼成の良い坏である。

須恵器坏は大形のもので、底部は回転範削りで、周囲に薄く高台状に削り残している特徴的な技法が見られる。蓋は大形で、返りをもち、ボタン状の鉢を有するものかと思われる。これについては後述する。

住居跡はN-80°～93°-Eとほぼ方向を同じくし、規模は57住がやや大きい。カマドは壁をやや掘り込んだ浅いものである。

真間Ⅳ期の遺構は第6号住居跡である。

器形は甕・坏・皿・塊がある。丸胴の甕・鉢等は共伴していない。

甕は器肉が薄く、括れて大きく外反し、肩部との境にかすかに段をもつ。坏は小形のものも扁平な底部と外傾気味の口縁をもつものが多くなる。塊も同様の変化が見られ、範削りによって、非常に薄くなっている、焼成も良い。

なお、台付甕も共伴しており、肩部の張る脚部の大きいもので、以後散見されるようになる。須恵器は件出してないが、返りをもつ蓋はこの時期に消滅するものと思われる。

真間Ⅳ期の遺構は第18号住居跡がある。

器形は甕・壺・皿・須恵器甕・壺・塊がある。

甕は丸胴で肩部は丸く緩く括れて口縁は立気味になるものと、長胴のものは肩部がやや張り、頸部は殆んど段を持たず口縁部が立ち気味に外反する。やや新しいものと從来の口縁の大きく外反するものがあり、器肉は薄い。

壺は平底を意識したものが多くなり、底部のみ笠削りするものが増え、放射状暗文笠磨きの平底の壺もある。皿は底部扁平で鈍く稜を持って口縁部が短く外反気味に立上がるるものである。須恵器甕・盤・そして底部糸切りのままの壺がある。住居跡は4.5mクラスで東カマドである。

真間Ⅴ期の遺構は7・17・34号住居跡がある。

甕は丸胴のものは頸部は括れて立ち、内湾気味に外反する口縁をもつものがあり、これは9世紀に入って盛行する「コ」の字状口縁の古い形かと思われる。長胴甕は肩部がやや張り、かすかに段を持って頸部で立ち気味に外反し、口縁は更に外反するものである。

壺は6種類あり小形で丸底状のもの、底部を平底に削り、ナデツケた体部が外傾気味に立上がるものの、体部下端まで笠削りする深い器形のもの、やや大型で前段階から続くものであるが、削りによって、底部・口縁部・体部に境に稜を持つもの等がある。皿は大形の扁平な丸底状のものと、平底で屈曲して口縁が短く外反するものがある。鉢は平底で、体部外傾し、口縁が直立気味になるものである。

須恵器は高台付壺と底部・体部に粗い笠削り痕を残す壺が出土している。

住居跡は7・17住共東カマドをもち、カマドは壁に深く掘り込まれたもので、17住は台形状のプラランをもつ。

真間Ⅴ期と国分Ⅰ期の間には1段階が考えられる。

国分Ⅰ期は第46号住居跡がある。

器形は甕・壺・鉢がある。

甕は胴丸のものは頸部の括れが若干強くなる。長胴のものは、真間Ⅴ期とほぼ同形のものと、肩部に段を持ち、頸部がやや立ち気味になり、外反する口縁部が先端で内湾気味になるものがある。他に小形の甕があり、台付甕であろう。

壺は口径12cm前後の小形のものと14.5cm前後のやや大形のものがある。小形のものは伝統的な丸底状を呈するものは少なく、底部は平底状で、ナデる体部は丸味を持ち、内湾気味に直立する口縁部をもつものが多い。大形のものはつくりは前段階とほぼ同様である。少數ながら、内面に暗文を有する壺が残る。鉢は、2種類あり、前段階の、平底で体部が緩やかに立上がり、口縁部直立するが、口縁の体部の境のはっきりしているものと、体部下端が張り、口縁端部の外反するものがある。須恵器は大形の甕2点、横瓶、周辺部笠削りの壺、小形の高台付壺、紡錘車が共伴している。

国分Ⅱ期の遺構は第16・44号住居跡がある。

器形は壺・甕があるがいずれも破片である。甕はいわゆる「コ」の字状に外反するもので、雷電

下5号住例がある。年代は9世紀第3四半期頃と思われる。住居のプランも概期の主軸方向に長い長方形で、カマドはほとんど壁外に掘り込まれている。国分Ⅲ期の遺構は第21・56号住居跡がある。

土師器甕は「コ」の字状を呈するが、肩部の丸い台付甕等、やや混在の可能性もあるので9世紀後半頃を、56住の遺物中には須恵器があり、寄居町末野窯跡群花園支群2号窯跡をあてて、10世紀第1四半期頃を考えた。

住居跡は56住のみプランがわかり、当期に通有の、短辺にカマドをもつ、長辺の長い長方形を呈する。カマドは東カマドである。

最後に奈良Ⅰ期とした第58号住居跡出土の小形の須恵器甕と蓋について若干検討してみよう。この2点はいずれも住居跡の床面から出土しており、他の土師器類と共に一括遺物として良いものと思われる。須恵器甕は口径8.1cm、水挽き整形され、静止糸切り後に、周辺部に手持ち箒削りを行なっているのが特徴である。このような口径の小さい甕類は陶邑古窯跡群ではⅡ期に特有のもので、かえりと宝珠つまみをもつ蓋とセットとなるものであり、第1段階～第2段階のものと考えられる。第3段階では本例と異なって、口縁部が外反するものが多くなる。飛鳥・藤原宮跡の編年では、小怪の「甕G」は飛鳥Ⅰ～Ⅳ期にかけて見られ、口径9cm前後と小怪化するのはⅤ期でありⅥ・Ⅶ期ではやや大きいものである。又、県内出土例では舞台遺跡C1号窯跡例があり、類例のあまりない特徴ある器形の甕であるが、これは7世紀第2四半期頃と考えられている。(註3)これらを考え合わせると、一応、この形態の甕は7世紀中葉頃まで遡り得るものと考えられよう。

蓋は口径11.1cmを測り、頂部は回転箒削りを施し、天井部は高く、裾部で段を持ち、やや拡がる。かえりはしっかりしているがやや短く、口縁端部を結んだ線よりもやや内側にある。この形態の蓋は陶邑古窯跡群ではTK217～48段階に見られ、飛鳥・藤原宮においては飛鳥Ⅲ期に多く、一応、7世紀第3四半期に遡り得るものと考える。

次に真間Ⅲ期とした、第60号住居跡覆土中から、かえりをもつやや大形の須恵器蓋破片と共に須恵器甕の破片が出土している。破片は4点あり、2点は底部と口縁部があり、図中にのせたもので、他は写真図版にのせたものである。これらは底部を回転ヘラケズリし、ケズリによって浅い高台状に形づくり、もしくは高台がはずれた様に見えるものである。これは水深遺跡13号住・北山1号窯跡例と同様の特徴を持ったものと思われる。(註3)

(大和 修)

註1 後張遺跡現在当事業団にて整理中昭和58年3月刊行

2 駒宮史朗・菅谷浩之ほか「中道・西北原遺跡」 埼玉県遺跡調査会1974 第27号住居跡出土例

3 金子真土「北武藏の須恵器—7・8世紀の様相について—」 埼玉県立歴史資料館研究紀要第4号

1982

(引用・参考文献)

田辺昭三「陶邑古窯跡群！」 1966 平安学園考古学クラブ

田辺昭三「須恵器大成」 1981 角川書店

中村浩「陶邑Ⅱ」 1978 大阪文化財センター

「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」 1978 奈良国立文化財研究所

栗原文蔵・中島利治・小林重義「水深」 1971 埼玉県遺跡調査会

増田逸朗・鈴木沼夫・小久保徹「下田・課訪」 埼玉県教育委員会

駒宮史朗ほか「雷電下・魚玉東」 1979 埼玉県教育委員会

3 ま と め

若宮台遺跡の所在する上里町は、埼玉県の最北端に位置し、神流川の県境をもって対岸は群馬県に接している。

埼玉県側の神流川右岸では、上流の神川村寄島付近から形成されている扇状地には、縄文時代からの遺跡が數多く確認されているが、とりわけ古墳時代からの開発が急速に進んだと思われ、鬼高期からの住居跡を含む奈良～平安時代の集落遺跡がいくつも重複しながら連なっている。

又これら集落に伴う古墳群も、旧村名を冠した青柳古墳群の中に、古式の形態を有する横穴式石室の主体部を持ったものが明らかとなっており、埼玉県内でも初現期の横穴式石室例として注目されている。

そして、下流の上里町の利根川との合流点付近にかけても、同様の現象をみることができるが、上里町では氾濫が進んでおり、遺跡は厚い堆積土に覆われ、表面上からの観察では、その存在を把握することは、なかなかむずかしい面を持っている。

治水の発達した今日と異なり、当時にあっては他の河川流域と同じく、初期稻作文化の時代には大河川流域での農耕は、未発達な灌漑技術では洪水や自然の猛威に対処しきれなかつたであろうとする考え方が一般的である。

このため、弥生時代の明確な遺跡は確認されていない。しかし、周辺の丘陵には須和田期の土壙なども発見されており、谷田の開発を通して弥生期の文化は着々と蓄積され、干地への進出が始まつたのであろう。

若宮台遺跡付近の地形を細かく観察すると、畠地の地形が帯状に川の流れをおしとどめる箇所があり、それらをたどるとかつて、いく筋もの流れが存在していたことが判る。これが常に流れていたものか、あるいは増水時や洪水時に流れているものかは不明であるが、今回の試掘トレンチにより砂や砂利などが堆積している河床が認められるところから、集落が形成している畠地面の麓をとり囲むように流れしており、飲料水の攝取などに活用されていたのであろうことが想像に難くない。

これらのことばは、広大な面積を調査したのにもかかわらず、集落内に井戸跡が1基も検出されなかったことからも十分考えられるものである。

特に今回の調査では、一部の工事中に偶然発見されたものであるが、五領期の土器が出土したことは注目される。

今まで、若宮台遺跡周辺ではこの期の土器が発見されたことはなく、上記の様な考え方からこの時期には開発がまだ行なわれなかつたであろうと推定されていた考え方を一変するものである。

五領期の土器がどの様な遺構に伴うものは残念ながら不明であるが、いずれにせよ住居か方形周溝墓等の墓跡と思われるのが有力である。細かい点では立地等に若干の違いを見るが、対岸の群馬県藤岡市小林では該期の集落遺跡も発見されており、神流川を挟んで密接な関係にある両地域は類似した発展過程をたどつたといえよう。すでに周辺地域の丘陵地帯では五領期の方形周溝墓や弥生時代集落が発見されているが、立地という点では全くの違いをみると、立地要因の相違は先の生

産技術的な面が多分に影響しているものとみることができよう。

若宮台遺跡が大いに発展した時期は古墳時代も後期に入つてからで、土器形式でいうところの鬼高窓に至つてからである。36・39・40号住居跡からは須恵器が出土しているが、これらの須恵器は古式須恵器と呼ばれる一群である。県内でも鬼高窓の段階に入ると普遍的にみられ、近年その出土例を増している。特に児玉群内では調査例が多く、その产地同定に関しては在地生産の可能性が問題視され、地方窯の成立に拘わる新らたな見解が提唱されつつある。

すでに東北では大蓮寺窯跡や県内では桜山窯跡など須恵器窯の地方拡散も証明され、各地に於て独自の展開をみせている。

若宮台遺跡の周辺では、集落遺跡の他に遺跡南方に五明庵寺が所在している。五明庵寺はその出土瓦から創建時期が8世紀前半に求められ、単舟16葉蓮華文軒丸瓦は群馬県植木庵寺、寺井庵寺と同窓とされている。

寺域がどの範囲に及ぶか明確ではないが、ちょうど若宮台遺跡と五明庵寺の間に、今回試掘を行なった旧河川跡が入るので、この自然の境界により寺域が区切られていたものであろう。

五明庵寺の北西には「天神社」が存在しているがこれは旧加美郡式内社4座のうちの1つと推定され、若宮の字名もこの神社に因っている。

これらのことから若宮台遺跡の昔なまれていた時期には五明庵寺やかつての式内社である天神社が同時に存在していたことになり、加美郡でも中心的な位置を占めていたことが知られる。

又出土遺物の中に線刻文字の書かれている紡錘車がある。○○二年十二月と読めるが年号は不明である。年号の部分磨滅によって判読できないのが残念であるが、この年号日付が何か特殊な意味を持つものであるのか不詳である。入手した時かあるいは、紡錘に関する祭事の時に刻まれたものか興味ある資料である。

このほか旧河川の試掘トレンチ内から、台付盤2個体が河床に並びそろえ置かれた状態で出土しているのが注目される。

設置の状況から土器が置かれた時点においては、この位置には水が流れているとは思われず、器種の点から祭祀的な行為が行なわれた跡とみるのが妥当であろう。行為の行なわれた場所が河川ということから、水に関する祭祀といえよう、祭祀の内容としては水靈信仰から集落内の飲料水確保の祈願的なものであろうか。

以上、若宮台遺跡が内包する多くの問題から一部を概略まとめ結語とする。 (駒宮 史朗)

参考図書

- ◎坂本和俊「児玉郡周辺の考古学研究の課題」いふき6・7号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 昭47年
- 田口一郎「塚原遺跡—古式土師器を出土する遺跡」いふき6・7号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 昭47年
- 坂本和俊「神無形横穴式石室の検討」原始古代社会研究5 校倉書房 1979年
- 増田逸朗「北武藏における横穴式の変遷」信濃 第29巻7号 信濃史学会 1975年
- 増田逸朗「児玉郡神川村北塚原古墳群」第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1971年
- 皆谷浩之・駒宮史朗他「青柳古墳群発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会 1973年
- ◎埼玉県古代寺院跡調査報告書 埼玉県史編さん室 1982年

VII 附 編

若宮台遺跡出土土器の胎土分析結果報告

井 上 勲

目 次

1 実験

1—1 試料

1—2 X線回折分析

1—3 電子顕微鏡観察

2 実験結果の取り扱い

2—1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

II) Mo-Ch, Mi-Hb菱型ダイヤグラム

2—2 烧成ランク

2—3 タイプ分類

3 実験結果

3—1 タイプ分類

3—2 まとめ

1 実験

1—1 試料

分析に供した試料は第4表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 ϕ 10%の試料台にシルバーベーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1—2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回折分析法によった。測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球：銅対陰極、フィルター：ニッケル、印加電圧—電流：30KV—15mA、スリット系： 1° — $0.15mm$ — 1° の条件でおこなった。走時速度は $2^{\circ}/min$ 、フルスケールは800カウントとした。なお、胎土の分析に先だって原土と思われるローム質粘土の分析をおこなった。X線回折試験は原土、電気炉において $700^{\circ}C$ 、 $900^{\circ}C$ で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 $700^{\circ}C$ 、 $900^{\circ}C$ と順次実験をおこなう）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析をおこなった。ただ、 $900^{\circ}C$ 以上に

なった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1—3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物、およびガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によっておこなった。観察には日本電子製T—20を用い、倍率はX45, 300, 700, 1500, 4500、の5段階でおこない、写真撮影をした。45～300倍は胎土の組織、700～4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第4表胎土性状表に示すとおりである。第4表右側にはX線回折試験にもとづく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類をおこなった結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中にあらわれる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。ガラス量は大略 $20^{\circ}\text{--}10^{\circ}\text{--}20^{\circ}$ の範囲にあってチャートが全体に膨れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。電子顕微鏡観察によって得られたガラス量とX線回折試験におけるガラス量とを比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリストバライト(Cr)など組成上の組合せによって焼成ランクを決定した。

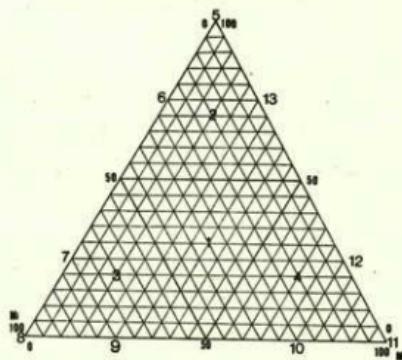
2—1 組成分類

1) Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム(第154図)

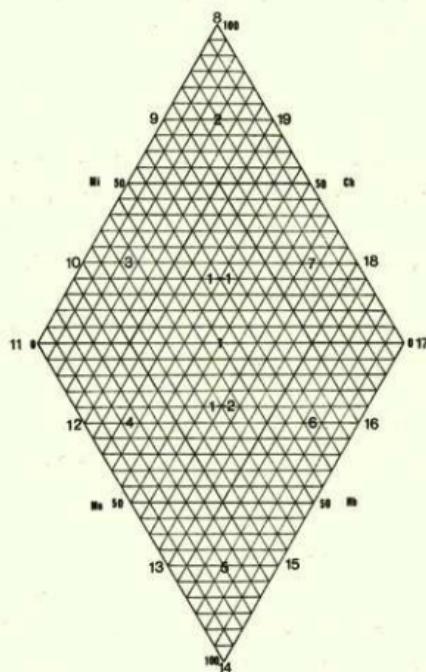
第153図に示すように三角ダイヤグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土についておこない、各胎土の位置を数字であらわした。Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14に含め、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を百分率(%)で表示する。モンモリロナイト(Mo)は $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の①～⑩はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることをあらわしている。位置分類についての基本原則は第153図に示すとおりである。

2) Mo—Ch, Mi—Hb菱型ダイヤグラム(第155図)

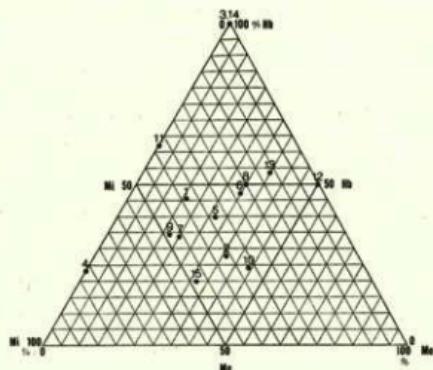
第154図に示すように菱型ダイヤグラムを①～⑯に分割し、位置分類を数字であらわした。記載不能は⑰として別に検討した。記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち⑮～⑯3成分以上含まれない、⑯Mo、Ch2成分が含まれない⑯Mi、Hbの2成分が含まれないの3例がある。菱型ダイヤグラムはMo—Ch, Mi—Hbの組合せを表示するものである。Mo—Ch, Mi—Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎に百分率であらわすもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、各組合せ百分率を記載したものである。菱型ダイヤグラム内にある①～⑯はMo、Mi、Ch、Hbの4成分が含まれ、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分が含まれていることを示す。①—1と①—2は現在のところ大きな意味はないが胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分



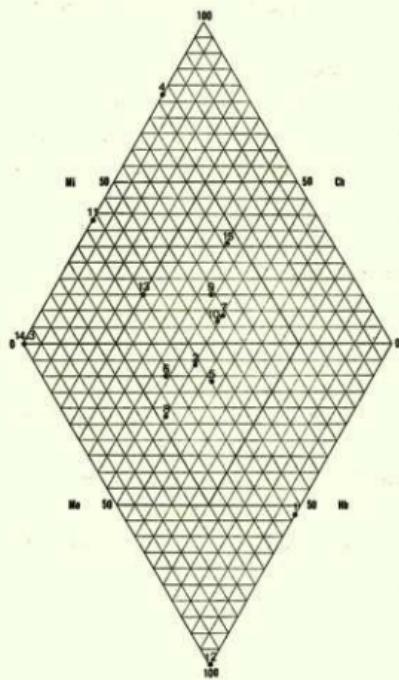
第153図 Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム



第155図 Mo—Ch + Hi—Hb菱型ダイヤグラム



第156図 三角ダイヤグラム位置分類図



第157図 菱型ダイヤグラム位置分類図

が必要となるかもしれないが現在は①として一括に取り扱った。位置分類についての基本原則は第154図に示すとおりである。

2—2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と電子顕微鏡観察によるガラス量によっておこなった。ムライト(Mu)は磁器・陶器など高温で焼かれた状態ではじめて生成する鉱物であり、クリストバライト(Cr)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づきX線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

①焼成ランク I …高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

⑤焼成ランク V …ムライトとクリストバライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。

⑥焼成ランク II …ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面をなし、ガラスのつながりにかける。

⑦焼成ランク III …ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

⑧焼成ランク IV …原土に近い組織を有し、ガラスがほとんどできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが胎土の材質すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといふ異なる焼成ランクが出現することになるがこの点については第4表の右端の備考に理由を記した。

2—3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱型ダイヤグラムの位置分類による組合せによっておこなった。同じ組合せでも土器胎土は位置分類の数字組合せも同じはずである。タイプ分類は三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるので便宜上、アルファベットの大文字を使用し同じ組合せのものは同じ文字を使用し表現した。例えば三角ダイヤグラムの①菱型ダイヤグラムの①—1の組合せはA、三角ダイヤグラムの②、菱型ダイヤグラムの②はBという具合である。各文字の後の()内の数字は三角、菱型ダイヤグラムの位置分数の数字を合計したものである。近い組合せを示しながら位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には試料数の多いものの類似としてA'などと、ダッシュを付けて分類した。なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試験数の増加とともに統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3—1 タイプ分類

土器胎土は第4表胎土性状表に示すように、第155図三角ダイヤグラム、第156図菱型ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Fの6タイプに分類される。WK-15は若宮台遺跡の現地粘土であり、WK-1～14は発掘された土器である。タイプ分類において在地性であるか否かの判

断はWK-15の組成を規準とした。焼成ランクはⅢ～Ⅳが多く、ガラス量が少なく、原土の組織をよく残しているものが多いが、焼成ランクⅠ～Ⅱに含まれるものもある。全体に粗粒の石英(St)斜長石(Ps)を多く混入している。とくに特徴といえることは斜長石(Ps)を非常に多く混入する土器胎土の存在することである。

Aタイプ…WK-2、5、6、7、8、9、10、15、(13)'

WK-15は現地の粘土であり、そのピーク高さは土器胎土にくらべると2～3倍であるが、組成分類に示されるようにモンモリロナイト(Mo)雲母類(Mi)緑泥石(Ch)角閃石(Hb)は組成比率はあまり変わらない。全体に焼成ランクはⅢ～Ⅳで焼きの温度は低く、原土の組織を残しているがWK-2のようにムライト(Mu)クリストバライト(Cr)が生成しているものもある。WK-10は原土に近い状態であり、焼きの温度が低く、ガラスはほとんどできていない状態にあり原土の組成を維持しているため、ピークの高い組成となっているものであろう。WK-13は4成分を含むがその比率において位置分類上異なるが在地性の近いものとしてA'とした。

Bタイプ…WK-1

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)角閃石(Hb)よりなり、緑泥石(Ch)に欠ける比企丘陵周辺ではMi、Chは粘土中に含まれるのが普通であり、Chに欠けるということは比企丘陵周辺のものとは異なる粘土で造られている可能性が考えられる。焼成ランクはⅣと低く、原土の組織を残している。

Cタイプ…WK-3、14

緑泥石(Ch)と、角閃石(Hb)の2成分よりなり、モンモリロナイト(Mo)と雲母類(Mi)を欠く。WK-3は多孔質のガラスを多く生成し、割合に質のよい粘土を素地としている。焼成ランクはⅠ'で割合が高い。WK-10は粒径のよくそろった良質の粘土で焼成ランクⅡ～Ⅲ、ガラスのできは割合に良い。WK-3、10とともに焼成ランクはⅠ～Ⅱと高く、良質の粘土を素地とする点に共通性がみられる。

Dタイプ…WK-11

雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)の3成分よりなり、モンモリロナイト(Mo)に欠ける。同様の組成は次のEタイプである。WK-4にも認められ、あるいは两者とも同じ分類に入るかもしれないが、位置分類上は同一のものとするにはいくぶん抵抗がある。焼成ランクはⅣと低く、ガラスの生成も悪く、原土の組織を残す。

Eタイプ…WK-4

雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)の3成分よりなり、モンモリロナイト(Mo)に欠ける。Mi、Ch、Hbのピークは高く、美里村周辺の粘土に近い組成を示す。焼成ランクはⅢと低く、ガラスのできが悪く、原土の組織を残している。

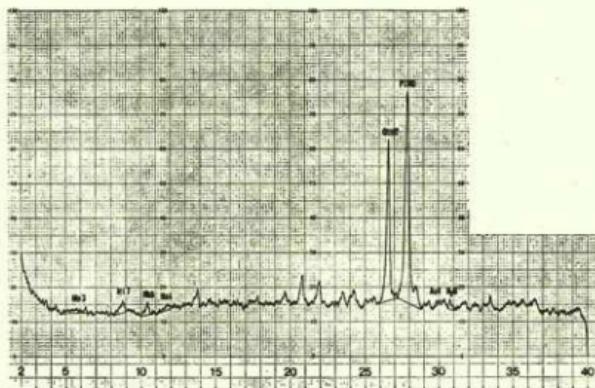
Fタイプ…WK-12

モンモリロナイト(Mo)、角閃石(Hb)の2成分よりなり、雲母類(Mi)緑泥石(Ch)に欠ける。比企丘陵周辺の粘土であればCh、Miが入らないものはほとんどなく、組成上からも

比企丘陵とは異なる土地で造られたものと考えられる。焼成ランクはⅠ～Ⅲと高く、発泡したガラスが多く生成し、粒径のそろった良質の粘土を使っている。

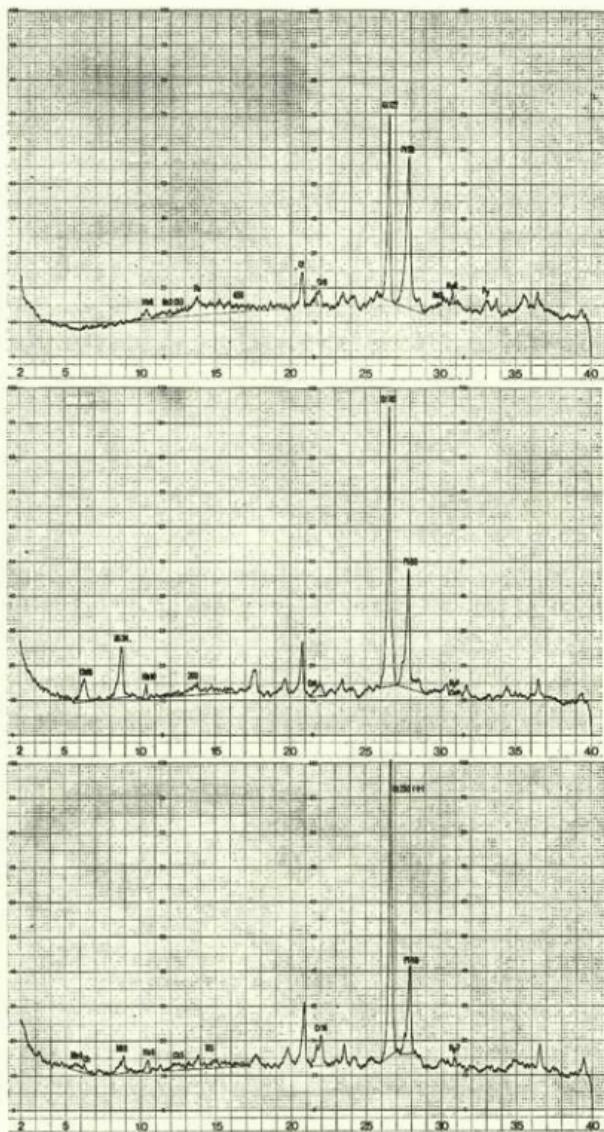
3-2 まとめ

若宮台遺跡で採取した粘土に代表されるように、本庄台地周辺のハードロームと呼ばれているものは水つきのロームと推察され、ローム中に含まれる角閃石（Hb）と三波川結晶片岩に由来すると考えられる雲母類（Mi）、緑泥石（Ch）、さらに風化生成のモンモリロナイト（Mo）の4成分よりなっているのが特徴である。とくにMi、Chは比企丘陵周辺では一般的であり、これらを混入しないものは在地として取り扱うのは難しい。（現在実験中の児玉町、古井戸、将監塚遺跡のハードロームもほとんどこの4成分よりなる）在地性と考えられるAタイプも含めて全体に淘汰の悪い粘土を使った、焼きの温度の低い、ガラスの生成の悪い土器胎土であるが、WK-3はCタイプに属し、焼成ランクもⅠ～Ⅲと高く、ガラスの生成の良好な土器胎土であり、その存在は電子顕微鏡写真で最も良く判別される。材質的にはWK-14は近いがガラスの生成が少ない。Eタイプは美里村周辺の粘土と組成が非常に類似しており、Dタイプもこれに近いものと判断される。FタイプはMi、Chを含んでおらず、焼成ランクもⅠ～Ⅲと高く、発泡したガラスが生成し、Aタイプなどとは完全に異った胎土性状を示す。

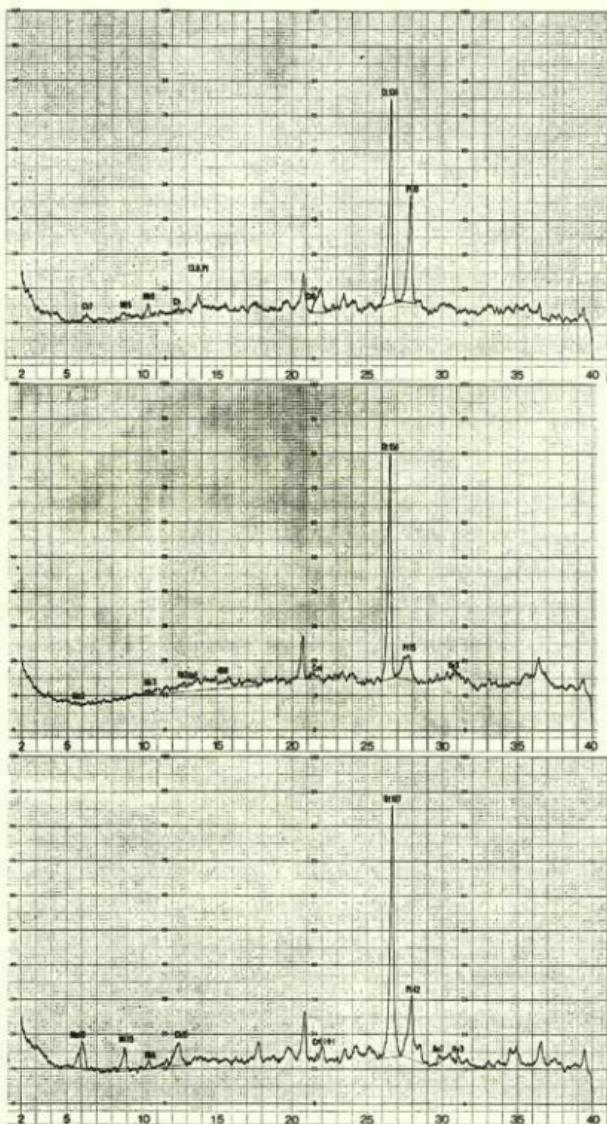


第158図 WK-1
Specimen :

Target	Cu	Receiving Slit	0615	mm
Filter	Ni	Count Full Scale	800	cps
Voltage	30	KV	Time Const	2 sec
Current	15	mA	Scanning Speed	2 min
Divergency	1	°	Chart Speed	2 min
Scatter Slit	1	°		
Note				
Operator				
Date				



第159図 WK-3 • 4 • 9



第160図 WK-11・12・15

試料	タイプ	焼成	組織分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)									ガラス量 (mm ²)	備考	
			Mo-Mi -Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka (Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr (Mu)		
No	分類	ランク														
WK-1	B (6)	N	①	⑩	3	7	8		(4)	4	6	107	140		40住-18坏	
2	A (2)	I ~ II	①	①-2	4	4	3	4		3	11	99	53	5(4)	40住-19坏	
3	C (6)	I'	⑤	⑪			8	3	(3)	3	8	122	98	8	40住-2坏	
4	E (6)	II	⑦	⑨		34	10	16			4	185	80	4	40住-1坏	
5	A (2)	II	①	①-2	4	5	6	3			3	112	300(+) 7(4)	40住-12坏		
6	A (2)	III	①	①-2	4	3	6	5			2	123	137	7(6)	55住-3坏	
7	A (2)	N	①	①-1	3	7	5	3			4	198	56		55住-1坏	
8	A (2)	N	①	①-2	5	3	8	5	(4)		4	96	46	10	55住-4坏	
9	A (2)	III	①	①-1	4	11	8	5			7	250(+) 60	14		55住-5坏	
10	A (2)	N	①	①-1	32	23	17	33		8	3	90	105		55住-2坏	
11	D (6)	N	⑥	⑩		5	8	7				136	70	8	36住-24坏	
12	F (6)	I ~ II	⑫	⑪	3		3		2(3)		3	150	15	4	36住-5坏	
13	A' (3)	N ~ V	② (1')	④-1	2	6	9	6		3	5	150	73		36住-8坏	
14	C (6)	II ~ III	⑤	⑪			4	4		3		250(+) 45	6		36住-25坏	
15	A (2)	V	①	①-1	10	15	6	15		7	3	167	52	4	遺跡付近採集粘土サンプル	

胎土性状表

写 真 図 版

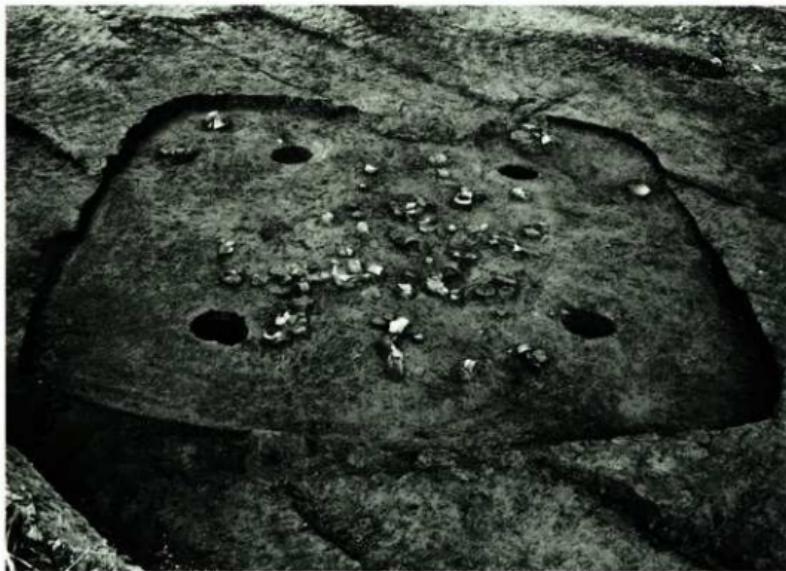


遺跡より北方を望む



天神社

图版 2



第1号住居跡



第2・3号住居跡



第6・7号住居跡



第6号住居跡カマド

図版 4



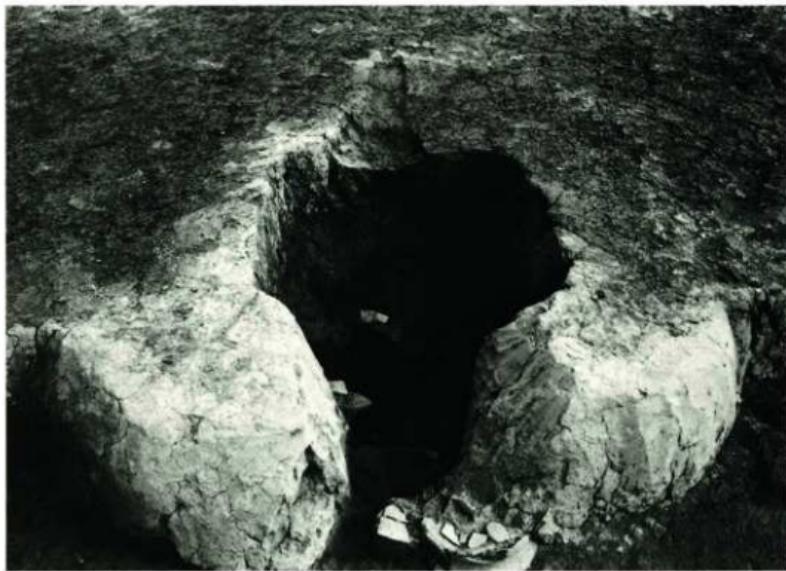
第8・9号住居跡



第9号住居跡カマド



第10・11号住居跡



第10号住居跡カマド

図版 6



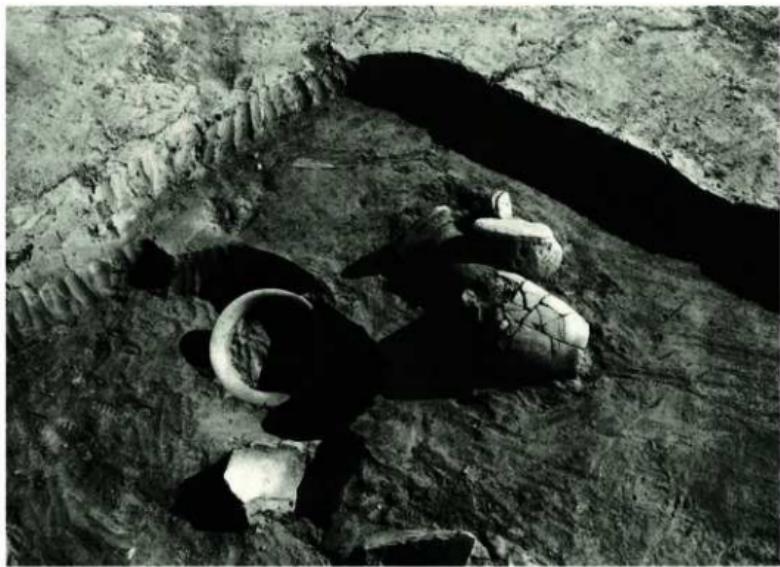
第12・13号住居跡



第12号住居跡 カマド

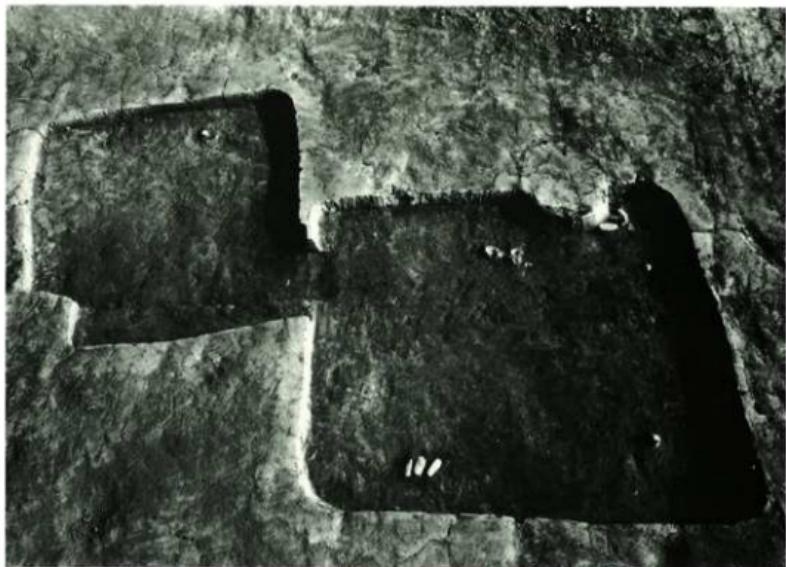


第14号住居跡



第14号住居跡遺物出土状態

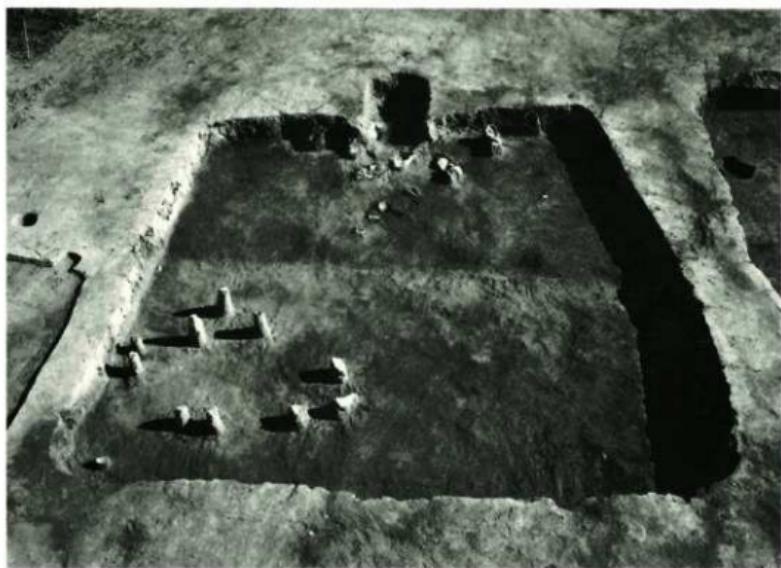
図版 8



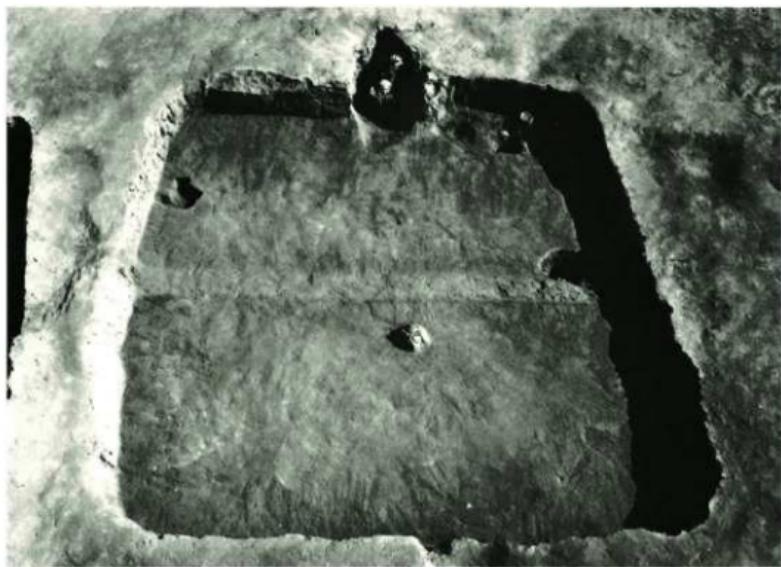
第15号住居跡・第4・5号土壙



第16号住居跡・第7号土壙

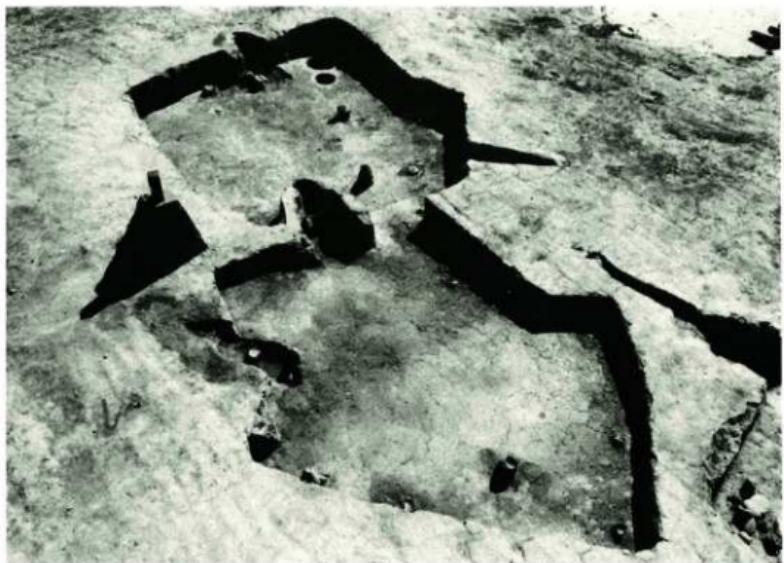


第17号住居跡



第18号住居跡

図版10



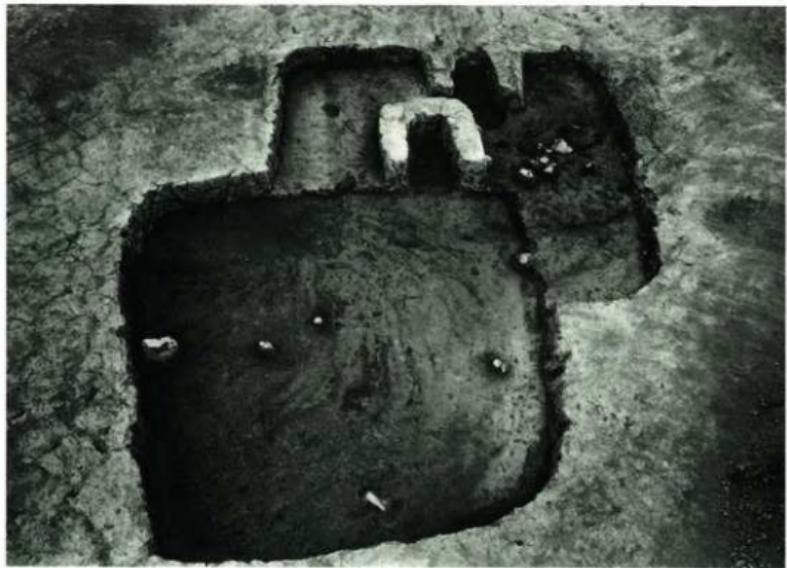
第19・20・21・22号住居跡



第19号住居跡カマド



第20号住居跡カマド



第23・24号住居跡

図版12



第23・24号住居跡カマド



第25・26号住居跡



第26号住居跡カマド



第26号住居跡遺物出土状態

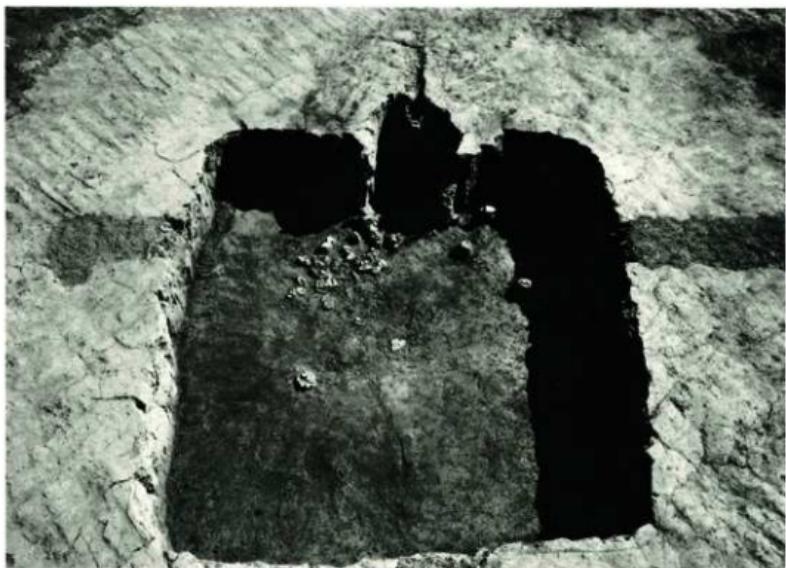
図版14



第27号住居跡



第28号住居跡



第29号住居跡



第29号住居跡 カマド

図版16



第30・31号住居跡



第31号住居跡遺物出土状態

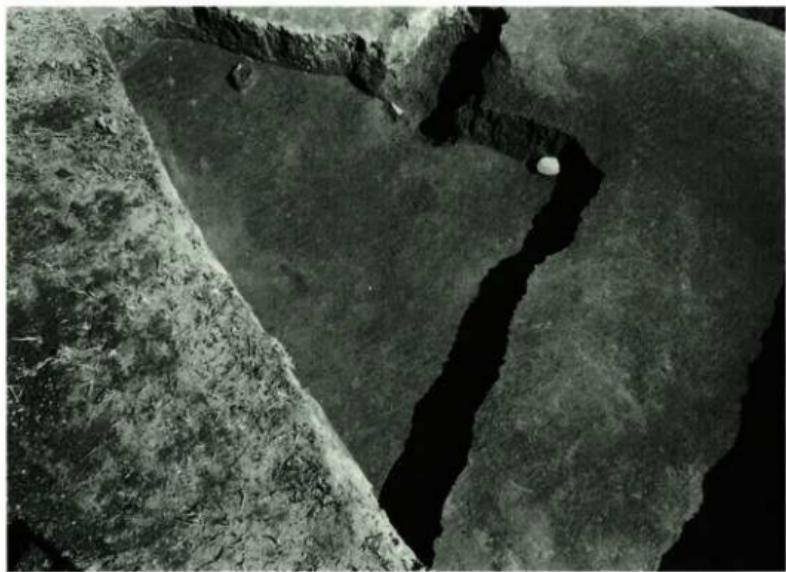


第32号住居跡



第33号住居跡

圖版18



第34號住居跡



第35・36號住居跡

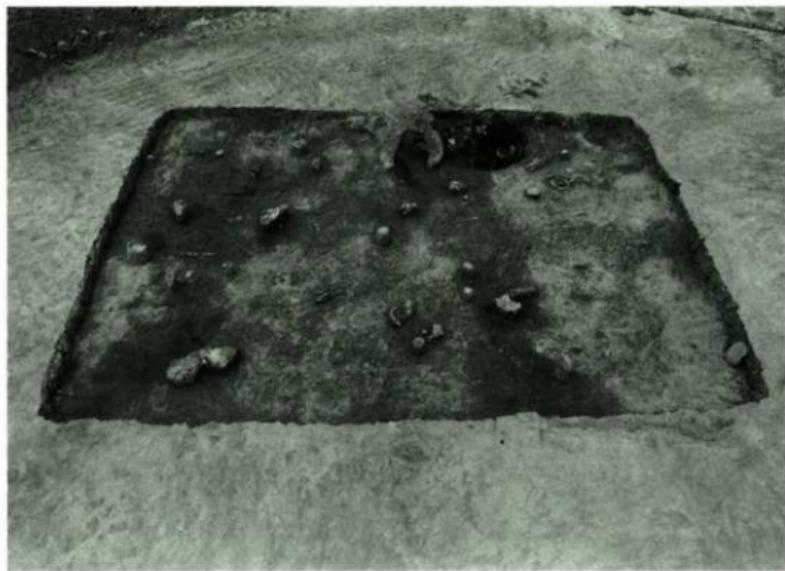


第36号住居跡 カマド

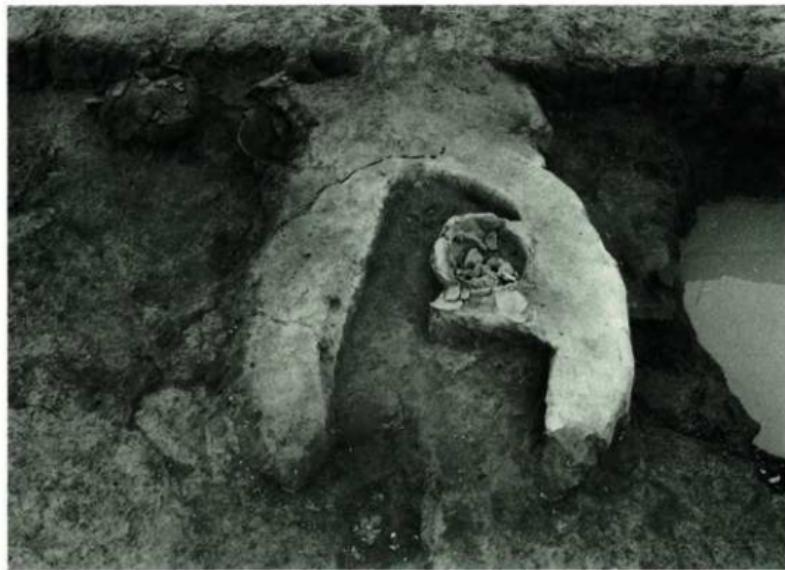


第38・39号住居跡

図版20



第40号住居跡



第40号住居跡カマド



第40号住居跡貯藏穴



第41・42号住居跡カマド

図版22



第43号住居跡 カマド



第44・45号住居跡

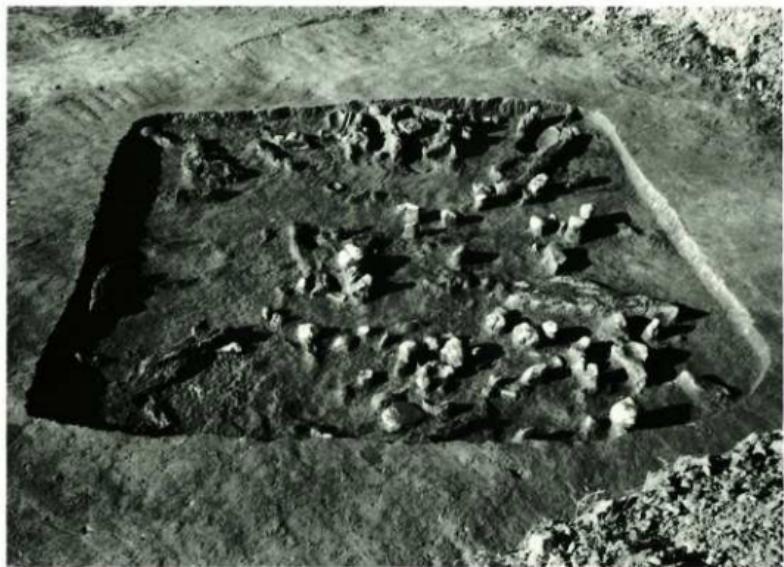


第46号住居跡



第46号住居跡貯藏穴

图版24



第47号住居跡炭化材出土状態



第47号住居跡



第47号住居跡 カマド



第47号住居跡貯蔵穴